

私たちの間違い易い漢字

—「cow」を多年、編集してきた—

小泉 洗

前川編集長から、再三再四、記事を書いてくれないかと頼まれてきた。ところがいずれも私には荷が重すぎるものばかりで、断り続けてきたが、それでもなお、「一つお願いします」である。そしてテーマも、これならば書けるのではないか、という所まで次第に近づいてきた。それでようやく腰を上げたわけである。少しでも、これを読まれる方々にお役に立てば、という考えである。

ご覧くだされ、お気づきの点はご遠慮なくご指摘くだされば幸甚です。皆さんが翻訳というお仕事を持って、それを続けておられるだけでもご立派なことだと思えますし、それに関係のありそうなことから始めて見たい。なお、私が編集をしてきた「cow」の会員はすべて私より優秀で、誤記というのは頭を絞らなければ出てこないの、今回は主に在職時代からのものを述べる勝手をお許しください。

○ 専門 × 専門 :

どうして、こんな簡単な漢字を誤るのか、と不思議になってくる。昨年の末、亡くなったという知らせを受けた上役がよく「人を訪ねて行って、口をきかない奴」がいるか」と言った。なるほど！訪問にしる、顧問、訊問、疑問、慰問でも、すべて口に関係していることが分かる。間違うのは「専門」で、どうして“専門”と書くのかと、不思議なのだ。

「門」という漢字の間の口もなくなり、スースーと風通しもよくなる

のではないか。つまり、「～をもっぱらとする」ということなのだ。ものも言いようで僅かな言葉で、どんなに老齢になってもピン！とくる説明、解説というものがあると思う。

例えば「享年」という漢字がある。これが“享年”とTVのテロップなどによく出てくる。覚えるというより区別が難しいらしい。これは「享」字の下半分の「子」から「この世に子として生を受けてから亡くなるまでの年数」としておけばどうだろう。なお、この儒年は次に「〇歳」と「歳」をつけてもよい、つけなくてもよいとのことである。

○ 応対 × 応待

これは「接待する」という言葉からの連想が強いのだろう。が、「応対」を語順を逆にすれば、「対応」となるけれど、「応待」の場合は“待応”となる。こんな熟語は見たこともない。このように、たったひと言の説明であつても誤記しなくなるのではないだろうか。東京は田町（山手線にある。芝浦の近くとも言えようか）の駅頭に勝海舟が西郷隆盛と会談した所があり、小さな石碑が建てられている。この二人（対）の会談によって、江戸は戦火から免れたのだった。

○ 西武鉄道 × 西部鉄道

これは私の在職時代の失敗で、「西武鉄道」と書くべきところを“西部鉄道”とやってしまった。隣席の仲間指摘された。このように指摘され

たミスは、いくら頭がボケてきても記憶に残っているものだが、これも日本にいてのことで、アメリカあたりに行っていて、ひょいと、こんな言葉に出会った場合、別になんの異常もない言葉である。アメリカの大陸横断鉄道が完成したのが1869年である。一番向こうまで貫通した年である。日本の「西武ライオンズ」は今年は優勝できるだろうか。

○ 克明 × 刻明 :

これも同僚からしてきされて記憶しているものである。この同僚はどうも中国育ちらしく、仕事がなければ椅子に寄りかかって平気でイビキをかいている人であった。定年退職後は「中国に行ってきた」という年賀状を受けとった。私は最初、板のようなものを傷つけてなにか文字を明らかにした、と解釈していた。「克」字は「よく」とも読み、書きする。

○ カづく × 力づく

戦後の国語改正期に面倒くさくなつて、「ず」も「づ」も同じように扱ってきた。しかし、区別しなければならない場合もあることに気づいた。「力づく」は「力の限り 例：力づくでも引っぱりこんでこい」／「カづく」は仮名書きの場合は「元気になる」という意味になるという具合に、もともと清音では「つ。す」という所が濁音になった、と使い分けてきたことが基礎であると考えればよからうか？

機械 器械 :

これは使い分けておいた方がいい、と私は「器械」は器に被われているが、「機械」はそうではないもの、と区別していた。しかし、どうも具合が悪いことが出てくる。「(朝日の)

新聞用語辞典を参照したら、「機械」は複雑または大型のもの、「器械」は単純または小型のもの、としている。このように同音類義語は厄介で、さわらぬ方が無難。しかし、避けて通れないものには、勇敢に徹底的に研究し挑むより他はあるまい。

○ 会心 × 快心

スポーツ新聞を読んでいる人には、あまり珍しくない熟語かも知れないが、一般紙では出てくるのがまれである。それだけに誤記することが多い気がする。「快心」も無理に解釈したら、「快い気持ちになること」「会心」は「わが心にピッタリかなった百点満点の」ということだろうか。

○ 欠如 × 欠除 :

いまだにどうやっても皆さんに納得して貰える説明になっていないのに、この「欠如」がある。昔、頭の足りない人のことをよく蛍光灯という言葉が流行った。私はこの蛍光灯が「欠如」にあてはまる気がする。「欠」字は元はまだまだ画数の多い難しい漢字であった。それが発音、意味が通じ合うことから「欠」字があてたものである。

○ 魚介類 × 魚貝類 :

九州旅行をした時、大分空港から帰ってきた。その時、空港でズラリと並んだ大きな土産店で、確か「色々の魚貝類があります」とかいた看板が立っていたのを思い出す。「ああ、ここでも間違いをやっている！」と思った。「何故、魚貝類とかいてはいけないのだろう」というのが最近までの疑問であった。私は自己流でもよい、自分で間違いなく書ければよい、という考えであるから、「魚貝」では「魚と貝」／「魚介」は「魚、

すなわち海産物全般にわたる“海の幸”と解釈している。「介」は「仲介、介添え」等々に見られるように、「お互いの間を仲立ちする」という意味、ニュアンスがあるのではないか。

○ 徐行 × 除行：

街の店、病院の看板等々に時々、“除行”と書いて掲げられているのに出会う。「うまいなあ！」と文字には感心するのだが、間違い字は頂けない。看板屋さんも何か資格みたいなものがある、それを取らなければ商売が出来ないらしい。それなのにどうしてこんな誤記をするのだろうと納得がいかない。これはよく間違ふ熟語である。何故、間違ふのか、私には分からないが、よく間違ふということだけは銘記しておいた方がよいかも知れない。「徐行」の「徐は「あわてず、ゆっくり何かをする様子」を表し、「おもむろに」とも読んでいることでも、そのニュアンスが分かるのではないか。

○ 辛抱 × 辛棒：

今まで「しんぼう」は「辛抱」と書くものばかり思ってきた。このお正月でもどこかのチャンネルで、「激辛食を誰が一番悲鳴をあげずに我慢して食べられるか」という競技があったように思う。「苦しいこと、辛いことをじーっと我慢して耐えること」に使うというのは、この二つの漢字からも理解できるが、これもよく“辛棒”と間違われて使われる熟語に取り上げてよい例である。ところが某日、大修館の「英語教育」誌の鶴沢編集長から「辛棒」でもよい、という辞書がありましたよ」とお知らせを頂いた。私は「あったとしてもそれは時代に迎合している」と思っ

た。ところがやがて家内にこの漢字を調べさせる機会が出てきた。辞書を引いていて家内が「どっちでもいよいよですよ」これにはまさしくこちらも驚いた。その辞書を私も見たが、「しんぼう 辛抱（辛棒）」という扱い方をしている。

○ 二束三文 × 二足三文：

辞書を引くと、どちらでもよいように書いてある。これなどは時代に押されたか、それに迎合したものと言えよう。「二束三文」とあつては、藁で編んだ草履で、現在ではほとんど値打ちのない履物なのだが、読み方が同じなので、つい、引っ掛かってしまう。これに似た例に正しくは「善後策」と書くべきなのに、“前後策”と書いて平気な人がいる。（ただし、こちらはどちらでもよい、とまでは辞書では述べていない）。

○ 大いに × 多いに：

某氏からの手紙にあった。最初、読んでいった時が「おかしいな」という気がチラッとしたが、注意を喚起するほどではなかった。二度目に読み返して、やっと気がついた。形容詞を副詞ほかに誤用している例がほかにも見られる。「劣る」は形容詞で「衰える」が動詞なのだが、「衰える」の「え」が抜けていたら、誤読、誤用してしまうのではないか。

○ 大勢 × 多勢：

これはもと、「多勢」とも書いていたような気がする。それを、「大勢で」で統一しようということになった。英語でも「たくさんの」は a great many of とか a great number of とか言っているので、これに影響されたのかも知れない（まさか？）

○ 定年 × 停年：

我が国では、働き手が少なくなり“定年60歳”が再検討されるようになってきた。こんな時には、手に職を持っている人が強みである。私の友人で一流の電機メーカーに就職したが、何か思い当たることがあったのだろう。サッサとやめてしまって、今、自営で仕事をしている。よくもあのバブル経済が弾けた時もうまく乗り切ってこられたものだと感心する。さて、「定年」といわれると、“限定された”というニュアンスが伝わってくる。ところが“停年”と書かれると、なんだか「一時停車だが、また働きだすぞ」という感じを受ける。普段からこれに対する用意が必要であるが...

(COW 編集長)